

実践報告「参加型授業」を目指して(2)

キーワード:参加型授業、協同学習、特派員

堀内 ちとせ

1. はじめに

英語に対して学習意欲の見られない医療系の学生たちの積極的な「授業参加」を図るために、2008年度から授業内の活動に「グループ活動」を取り入れる試みを始めた。2009年より、「協同学習(小グループで互いに助け合いながら学習を進めていくグループ学習の一つ)」の考え方である、「学習目標の設定」、「互恵的相互関係の構築」、「振り返り」の三つを取り入れ、学生たちの「授業参加」を促そうと試みた。

今回は、2009年度、後期の取り組みを振り返り、さらに、「プレテスト」と「特派員」という技法を取り入れた。医療系大学の必修の英語の授業における、2011年度、後期の1年2クラス(医療情報系43名・臨床工学系49名)の取り組みについて、学生たちへのアンケートをもとに検討する。

2. 方法

2.1 「学習目標」について

医療系大学で20年近くも英語を教えて来たが、授業の中で「学習目標」のようなものを立てたことがなかった。2009年秋に受講した「協同学習」のワークショップでは、「目標設定」をすることが重要であると学んだ。

2009年度後期の授業では、早速、授業の中で意識すべき2つの「目標」を掲げ、使用するプリントの最上部に大きく明記して示し、授業の始めに目標を意識するように呼びかけてみた。ところが、残念ながら、ほとんどの学生が「目標」を意識できていなかった。

今回は、教科書の内容に入る前に、学生たちに授業で意識して取り組んでもらいたい事柄を、語呂が良い幾つかの「キャッチフレーズの形」にして、毎回教員の後に付いて「全員に復唱」させた。これは、「協同学習」のワークショップで体験した「音読」の効果を応用した。機械的に音読するだけにならないように、敢えて「キャッチフレーズ」は文字として学生に示さず、教員の声だけを頼りに復唱させた。「キャッチフレーズ」の内容としては、授業内に心がけてほしい「約束事」のようなもの(資料1 参照)である。

「学習目標」の意識付けとしては、その日の主な学習ポイントを、簡単な「プレテスト」(資料2 参

照)の形で与えることにした(「協同学習法ワークショップ ADVANCE」理論編4より)。具体的には、今回使用したのが会話文中心のテキストだったため、その日に「マスターすべき表現」を、まず「日本語」で示し、学生たちに「英語表現」を各々考えさせてから授業に入った。表現までは考えられない場合は、辞書を使わず単語だけでも、自分で考えさせてから、その日の内容に入った。

「復唱」も「プレテスト」も共に、「目標」を意識させるために「学生」自身に活動させる(=参加させる)ことに重点を置いた。

2.2 「活動グループ」・「役割分担」について

初年度は、簡単な和訳小テストの結果により、一つの班に様々な学力の学生が混在するような4・5人の「活動グループ」とした。今回は、学生個人の「成績」等は全く考慮に入れず、単純に「男女比」だけを意識してグループ分けを行った。例えば、学生各々の「起床時間」や「登校時間」等をもとに計算式を作らせ、その計算値の高い順に男女それぞれ番号をつけ、その番号をもとにグループ分けを行った。学生自らの「行動」をもとにグループを作ることにより、「参加意識」を高めようとした。

メンバーは「4人」を基準とし、人数に端数が出る場合は臨機応変に「3人グループ」を幾つか作り調整した。メンバーを5人としなかった主な理由には、机が固定式であるため、お互いの声が聞きにくく話し合いがしにくかったことが一つある。しかし、実のところ、メンバー数を少しでも減らすことにより、学生が少しでも活動的にグループでの話し合いに参加できる(「ただ乗り」予防のため)ことを目論んだというのが、一番の理由である。

経験がない、あるいは経験の少ない学生たちが、少しでもうまく話し合いを進めて行けるようにと、初年度は、グループのメンバー各々に様々な役割を負わせ、さらに、役割を各週「順番に回していく」ということを考えた。ただ、1週間もすると、1週間前の「自分の担当した役割」を忘れてしまう学生がほとんどであった。「当番表」を作り授業前に各自で確認させたが、確認するのにも、かなり時間がかかり非効率的であった。そこで、今回は、グループ活動の際は「最初に発表するメンバー(=当番)」のみを定め、かつ、発表は必ず「右手回り(右手の方向)に回していく」という事だけを定めるに留めた。また、「当番」自体も、週ごとに右手回りに回していくことにより、更に平等性を高めた。

2.3 「特派員」について

今回は、「協同学習」の基本的な考え方である、個人で考えた(個人思考)後は必ずグループで確認し合う(集団思考)という流れを徹底させた。授業中であっても、教員の指示を聞かずに、とかく勝手な行動を取る学生が出現しがちであるが、今回は、少しでも気になる行動を取る学生を見かける度に、即、声をかけるなどして、路線修正を促した。今回は更に、グループを超えて「情報交換」

することができる「特派員」の技法（「協同学習法ワークショップ 技法7」より）を採り入れてみた。

「特派員」とは、「協同学習法ワークショップ BASIC」で紹介されている技法の一つである。「複数の考え方や解き方が可能な課題」に対して、グループでしっかり話し合いをさせた後、グループの代表（＝「特派員」）を決め、別のグループに派遣させる。「特派員」は派遣先で自分のグループの意見を報告すると共に、派遣先のグループの意見もしっかり取材する。取材後、自分のグループに戻り、「取材の成果」を報告する、といったものである。

「英語嫌い」ばかりが並ぶクラスでは、授業内の「気分転換」的要素が大きく物を言う。クラスの一部の学生だけであったとしても、「特派員」として他のグループに派遣させることは、「中だるみ」しがちな授業の危機から救ってくれる。また、グループから「特派員」という代表を送り出すことにより、日常生活に必須ではあるが、多くの学生がなかなか上手にできない「挨拶の練習」を行わせる事もできる。また、学生を他のグループに派遣させる事は、社会に出てからの、他組織への出張時の疑似体験（！？）をも実体験させる事ができる。

2.4 「振り返り」について

授業の最後には、「振り返り」を行った。前回の試みでは、チェックすべき項目や、記述すべき項目を「振り返りシート」を用いて行った。今回は、その日の授業での「自分の頑張り」、「授業中の気づき」を始め、「授業への前向きな提案」等を自由記載させた。今回は、「前向きな事柄」を記載することに、特に意識を向けさせた。

「自分の頑張り」では、「～ができなかった」と書く必要がある場合、「次は～も頑張りたい」と記述してみるように呼びかけた。「授業への提案」では、「～はやめてほしい」といったような、教員への苦情的な言い方ではなく、「～にしてみると、もっと頑張れそう」といった記述の仕方を呼びかけた。また、「授業中の気づき」では、「メンバーの頑張り」、「特派員先でのメンバーの頑張り」を始め、活動中に起こった「嬉しかった事」、「楽しかった事」、更には、授業中に流してほしい「洋楽のリクエスト曲」など、学生の気持ちが「前向き」になれるような事柄を記述するように呼びかけた。

授業中に解決できなかった「疑問点」などは、教員側に丸投げするのではなく、授業後にできる限り、自分一人での、または、仲間との解決を試みてもよと呼びかけた。

「前向きな事柄」を意識、かつ、記述させることにより、授業に対する「前向きな気持ち」、および、授業に対する「参加意識」を少しでも向上させようと考えた。

2.5 使用教科書について

専門が医療系であるため、健康科学系の会話中心の教科書である、Vivian Morooka 他(2010) *Vital Signs Essential English for Healthcare Professionals*. (東京:南雲堂)を用いた。

2.6 授業の流れについて

2.6.1 オープニング(15分～20分)

まず、英語の「歌の聞き取り」をして、学生の気分を盛り上げる(5分～10分程度)。学生たちが少しやる気になったところで、「キャッチフレーズ」(資料1 参照)を復唱させる(約5分)。これは、「協同学習」のワークショップで学んだ「音読」の効果を応用し、教員が音読する「キャッチフレーズ」を、学生には文字を見せずに復唱させる形を取った。学生は教員の言うキャッチフレーズを注意深く聞き、更にそれを声に出して言うことにより、意味をしっかり考えキャッチフレーズの内容を意識して、授業で実行してもらえよう目論んだ。

「キャッチフレーズ復唱」後は、前回の授業の補足説明を極力短めに行った。今回は、授業内に解決できなかった「疑問点」は、できるだけ授業後に仲間と相談するなどして解決するよう呼びかけた。それでも、残ってしまった「疑問点」や、注意しておくべき事柄等の説明は、ここで行った。

2.6.2 プレテスト(約10分)

授業の補足説明後は、その日の学習すべきポイントを意識させるための、「プレテスト」を行った。「テスト」と言っても、その日の授業で覚えてほしい表現の主なもの(5つ前後)の「日本語訳」を資料提示装置で提示し、各自で「英語表現」を考え書いてみるといった簡単な形式のものである。「英語表現」が思いつかない場合は、「単語」を書き出してみるだけでも良い。学生自身の頭を使って考えさせることにより、「学習目標」を少しでも意識させようと考えた。

思いついた「英語表現」は、「授業の紙」に書き出させる。しばらく、各自で考えた後は、「授業の紙」をグループで見せ合って、「新情報の交換」を行う。「テスト」ではあるのだが、個人に留まらず、グループで「新情報の交換」をさせるのは、少しでも多くの情報(聞き取りのヒントとなる)を得てから、教科書の会話の虫食い形式の「聞き取り」に入らせるためである。

2.6.3 教科書(約25分間)

「プレテスト」後、教科書に入る。「プレテスト」で、自分の書き出した、あるいは、グループのメンバーが書き出していた「英語表現」や「英単語」をヒントに、教科書の会話文の虫食い聞き取りに入る。会話文は、ノンストップで2回だけ流す。ノンストップでCDを流すのは、会話の自然な流れの中で「聞き取り」を行うためである。2回CDを流した後は、資料提示装置で「解答」を提示し、各自で答え合わせをする。

答え合わせが終わったら、「音読プリント(資料3 参照)」を見ながら、自分なりの「気づき」を「授業の紙」にメモさせる(資料4 参照)。「音読プリント」の表面には、教科書の会話文1文と、それに

対応する日本語訳が、会話の順序で載っている。「英語表現」と、それに対応する「日本語訳」を見ながら、間違いやすい点、間違えたくない点など、各々思いつくままにメモさせる。

各自で自分の「気づき」をメモした後は、グループで「新情報交換」をさせる。ここで、万が一自分では何も「気づき」のメモができなかった学生も、グループと情報交換することで、何がしか「気づき」のメモをすることができる。また、グループでの「新情報交換」が終わった後は、代表(=特派員)を決めて、他のグループに出張する旨を伝え、しっかり聞いて、しっかりメモするよう促した。

今回から、グループでの情報交換を制御させるために、LL のマイクを使用することにした。最初に「気づき」を発表することになっている、その日の「当番」のマイクのみをオンにして、「気づき」を一つだけ発表したら右手回りにマイクを回して行く。ここで、順番に一つずつ「気づき」を発表させることにより、メンバー全員に一言ずつでも発言の場を与えることができる。また、物理的に「マイク」を回していくことにより、スピーカーを秩序良く回して行くことができる。さらに、LL のモニター機能により、自分たちの話を、いつ教員が聞いているか分からないという状況のもと、学生たちは比較的、真剣に情報交換を進めていくことができる。

2.6.4 特派員(10分～15分)

グループで文法事項等の「気づき」についての新情報を交換した後は、グループを超えた情報交換の場である、「特派員」に入る。まず、グループの代表者である、「特派員」を決める。一人だけの代表を立てる場合は、当番(最初に発表をする人)のように、右手の方向には回して行かず、変則的に役割を回して行く必要がある(図1 参照)。

図1

変則的かつ、平等的に

第1週目		第2週目		第3週目		第4週目	
当番		特派員			特派員		当番
	特派員	当番		当番		特派員	

今回の「特派員」の右隣のメンバーが次回は「特派員」になることが分かると、代表になる可能性のあるメンバー以外は真剣に取り組まないといった事態が起こらないとも限らないからである。一方、「特派員」を複数立てる場合(図2 参照)は、そのような心配をする必要もない。「当番」以外全てを「特派員」とする場合、全員がグループの代表と言っても良いからである。複数、「特派員」を立てることにより、学生の授業への参加の可能性を向上させることも可能となる。

「特派員」が決まったら、「特派員」の出張先を決める。まず、**図3**のような図を資料提示装置で示す。次に、**図4**のような座席地図を提示して、各班の「特派員」に一気に移動させる。「特派員」が複数いる場合は、慣れるまでは、まず、「特派員①」の移動、次に、「特派員②」の移動、といったように順番に移動させることもできる。慣れてくれば移動もスムーズにできるようになり、4人グループのうちの3人を「特派員」に立てることで、一瞬にしてクラス全体をシャッフルさせることも可能となる。

図3

「特派員」が単数の場合(例1)



「特派員」が複数の場合(例2)



図4

「+」は「右」に移動



「-」は「左」に移動



「特派員」が派遣先に落ち着いたら、今度は派遣先で新情報を交換させる。スピーカークの秩序を保つために、スピーカークは「特派員」から「右手の方向」に回して行くことにする。「特派員」が複数いる場合は、「特派員①」から発言を始め、同じく「右手回り」に回して行く。グループで新情報を交換する時と同様に、マイクを一つだけオンにさせ、マイクを回して秩序コントロールを行うと共に、教員は学生たちの話をモニターしながら進めて行くのは言うまでもない。

派遣先での情報交換が終わると、元のグループに移動させる。授業時間の関係で、派遣先から戻ってからは、新情報のみを交換させる程度の交流を自由形式で行わせる。

2.6.5 発音(約15分)

「特派員」を通して「気づき」についての情報交換を十分に行った後は、「発音練習」である。まず、

お手本としてCDの音声と共に、「オーバーラッピング」をさせる。その際には、音読プリント(資料3参照)の「虫食い」面(表面)を見ながら行う。2・3回ほど、「オーバーラッピング」させた後は、グループで「表現の覚え合い」に入る。

まず、その日の「当番(最初に発表するメンバー)」から始める。当番は、音読プリントの「虫食い」面を見ながら、日本語の内容を言い表す「英語表現」を言う。言いよんでいる場合は、他のメンバーは、音読プリントの裏面を見て「助け」を出す。一つの表現をメンバーに助けられながら何とかクリアできたら、右手隣のメンバーに移る。「発音」の際にも、マイクを一つだけオンにして右手回りに回して行く。教員は学生たちの発音をモニターし、事あるごとに大袈裟に褒めるなどして学生たちのやる気を高めるような働きかけをする。

2.6.6 振り返り(約5分)

授業の最後には、その日の取り組みを毎回、「振り返り」させた。「自分のその日の取り組み」についての「自己評価」を書かせると共に、その日の「グループ活動」や「特派員」先で得られた興味深い「新情報」、その日の授業内に起こった「嬉しかった事」、「楽しかった事」、「前向きな事柄」は何でも書かせて、提出させた。「授業に関係する記述」を数多くさせることにより、「授業に参加」している(「傍観的立場」ではなく)という意識の向上を図ろうとした。実際、授業の「オープニング」で復唱させた「キャッチフレーズ」も、学生からの「前向きな提案」をもとに徐々に出来上がったものである。

授業後、残ってしまった「疑問点」なども、できるだけ学生の「前向きな行動」に結び付けられるように、自分で、あるいは仲間との解決を、まず試みってみるように呼びかけた。

3. 結果と考察

最後の授業時に、対象学生全員にアンケート調査を行った。アンケートの尺度は、「1」・「2」・「3」・「4」・「5」の5段階とし、「1」は「全くそう思わない」、「5」は「とても、そう思う」とした(『看護教育』(2010)AUG. Vol.51 No.8 P.725 参照)。また、可能な場合にはコメント等も記述させた。

具体的なアンケート項目は以下の通りである。

- ①「キャッチフレーズ」は、しっかり取り組めた。
- ②「プレテスト」は、しっかり取り組めた。
- ③「自分で頑張る時間」は、しっかり取り組めた。
- ④「グループで情報交換」は、しっかり取り組めた。
- ⑤「グループで発音」は、しっかり取り組めた。
- ⑥「特派員」は、しっかり取り組めた。
- ⑦「振り返り」は、しっかり取り組めた。

⑧授業に、しっかり参加できた。

3.1 「学習目標」について

図5

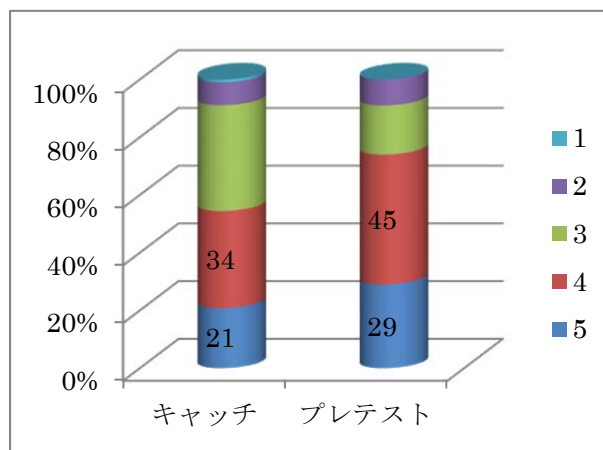


図5は、「キャッチフレーズ」(資料1 参照)と「プレテスト」(資料2 参照)について、「しっかり取り組めた」かどうかという項目に対するアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「5」・「4」と回答している学生を合わせた割合を比べてみると、「プレテスト」が70%を超えている(29%+45%=74%)のに対して、「キャッチフレーズ」は、過半数を超えている(21%+34%=55%)程に過ぎない。

「キャッチフレーズ」は、学生からの「前向きな提案」から生まれた、10行余りのメッセージから成っている。「元気になれた」、「前向きになれた」といったコメントが見られる一方で、「フレーズが長すぎる」、「英語の授業ではないみたい」等のコメントも見られた。もう少し要点を絞る必要があったかもしれない。

一方、「プレテスト」に対しては、「しっかり取り組めた」という項目に対して「5」・「4」と回答している学生が、74%も見られることより、その日の「学習目標」を、十分認識させてから、その日の授業に入ることができたと言えそうである。

3.2 「グループ活動」について

3.2.1 「自分で頑張る時間」VS「グループで情報交換」について

「協同学習」の基本的な考え方に、「個人思考と集団思考」というものがある。漠然とグループで話し合わせても、メンバー全員がすぐに話し合いに参加できるとは限らない。そこで、まず、自分一人で考え、自分の考えをまとめさせて(個人思考)から、グループで各々の考えを共有させる(集団

思考)のである。

図6

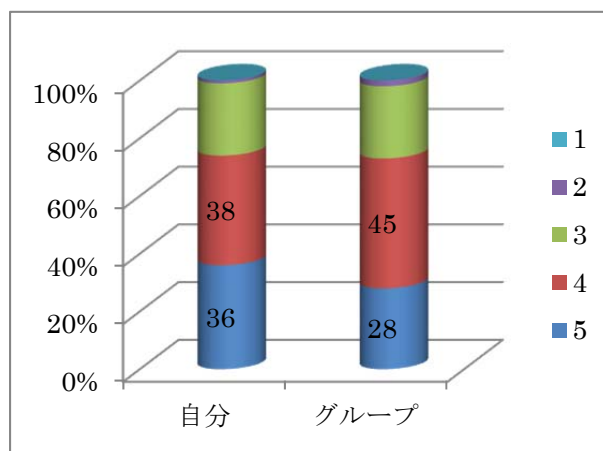


図6は、「自分で頑張る時間」と「グループで情報交換」について、「しっかり取り組めた」かどうかという問いに対するアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「5」・「4」と回答している学生を合わせた割合を比べてみると、どちらもほぼ同じくらい(36%+38%=73%、28%+45%=73%)である。「5」と回答している学生の割合が多少、少ないのは「グループで情報交換(集団思考)」という活動に、まだ十分慣れていないことが原因であるのかもしれない。ただ、コメントとしては、「自分の実力が分かった」、「自分で考えてから、皆の意見を聞くと理解がしやすかった」といったものが見られ、「自分」で考えてから、「グループで情報交換」といった形の効果を実感している学生も見られた。

3.2.2 「グループで情報交換」VS「グループで発音」について

図7

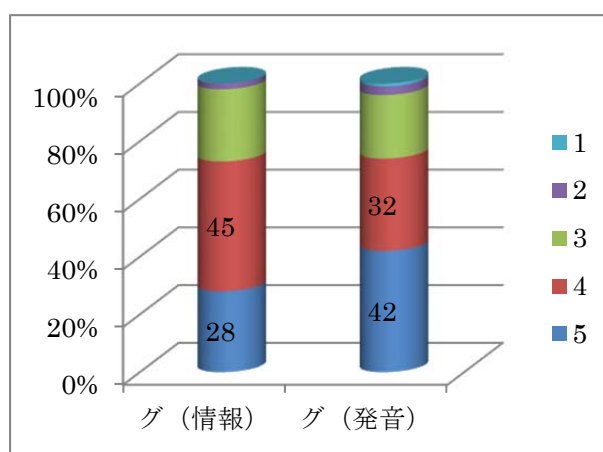


図7は、「グループで情報交換」と「グループで発音」について、「しっかり取り組めた」かどうかという問いに対するアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「5」・「4」と回答している

学生を合わせると、ほぼ同じ割合 (28%+45%=73%、42%+32%=74%)である。ただ、「5」と回答している学生を比べてみると、「グループで情報交換」が28%であるのに対して、「グループで発音」では42%である。

「友達と授業外も発音の練習をすることができた」、「覚えた表現を使って会話してみた」、「楽しくできた!」、「昼食後は覚え合いをする時間になった」等、「前向き」なコメントが多数見られた。「英語の表現」を覚えるなどの単純作業でも、仲間と一緒に行うことで「楽しさ」が増し、「英語嫌い」の学生にも英語の授業への参加の要因となる可能性があると言えるかもしれない。

3.3 「特派員」について

3.3.1 「グループで情報交換」VS「特派員」について

図8

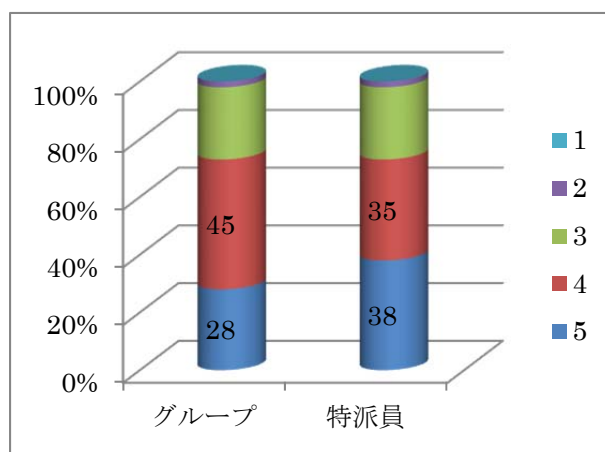


図8は、「グループで情報交換」と「特派員」について、「しっかり取り組めた」かどうかという問いに対してのアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「5」・「4」と回答している学生を合わせると、どちらも同じ割合 (28%+45%=73%、38%+35%=73%)で、70%を超えている。

「特派員」に対するコメントには、「特派員があったから頑張れた」、「色んな人と話す機会ができて良かった」、「聞いているだけではないので、眠くならなかった」など、「特派員」に対する前向きなコメントが数多く見られた。

3.3.2 「グループで情報交換」VS「特派員」のt検定

表1

	グループ活動(n=92)		特派員(n=92)		t(91)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
グ VS 特	3.99	0.79	4.09	0.84	-3.14 **

注:** $p < .01$

表1は、「グループで情報交換」と「特派員」の間における平均値の差を、有意水準1%で両側検定のt検定により検討した結果をまとめたものである。その結果、これらの平均値の差は有意であった。学生たちが、「特派員」の方がより「しっかり取り組めた」ということを、統計的にも示すことができた。

3.4 「振り返り」について

図9

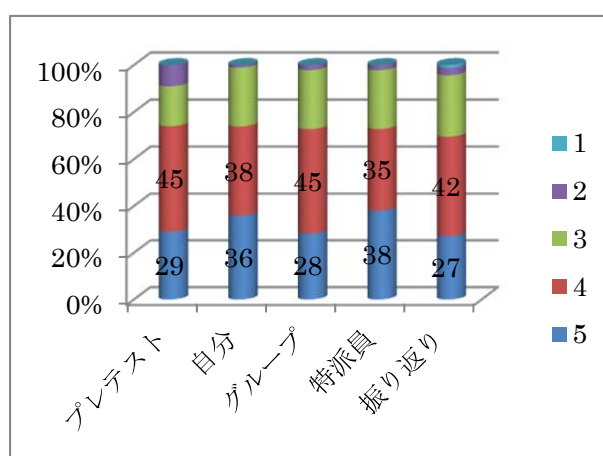


図9は、今回の試みにおける、主な取り組みメニューに対して、「しっかり取り組めた」という項目に対するアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「振り返り」も、他の取り組みと同様に、70%近く(27%+42%=69%)もの学生が「5」・「4」と答えている。

今回の「振り返り」は、特に「前向きな振り返り」ということに「力」を入れて行った。ちなみに、2010年度後期(図10では、2010年度とのみ表記)の「前向きな振り返りができた」という項目に対するアンケート結果と、今回(図10では、2011年度とのみ表記)の「振り返りは、しっかり取り組めた」という項目に対する結果を比較してみると、図10のようになった。

さらに、「前向きな振り返り」について、「2010年度後期」と「2011年度後期」の間における平均値の差を、有意水準0.1%で両側検定のt検定により検討してみると、表2のようになり、「前向きな振り返り」について、これらの平均値の差は有意であった。

2010年度における「振り返り」の自由記載では、何かと授業に対する苦情などが書きなぐられている事が多かった。その都度、クラス全体に対する「前向きな提案」をするように声をかけたが、残念なことに、ほとんど効果はなかった。2011年度のクラスでは、2010年度の授業を振り返り、授業改善に努めたが、実際のところ授業内容がそれ程大きく改善された訳ではなかった。それにもかかわらず、今回のような結果が出たのには、授業の最初から声を大にして、「前向きな言葉」を記すように、声掛けしていた事が大きく影響しているように思われる。何事にも言えることだが、「最初が肝心」である。

図10 「前向きな振り返り」

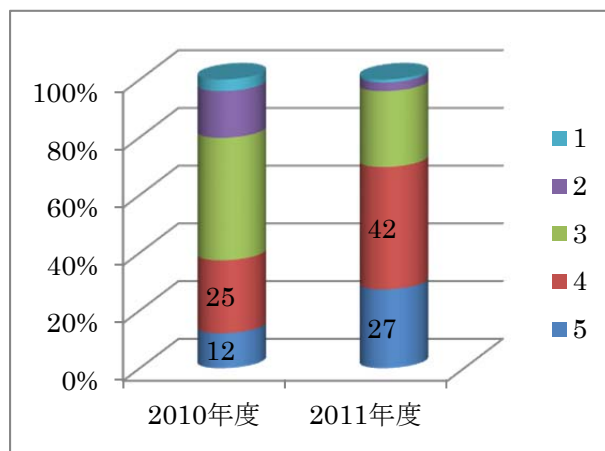


表2

	2010 年度後期(n=99)		2011 年度後期(n=92)		t(189)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
前向きな振り返り	3.25	1.00	3.91	0.87	-4.84 ***

注:*** $p < .001$

3.5 「授業参加」について

図 11 「授業参加」

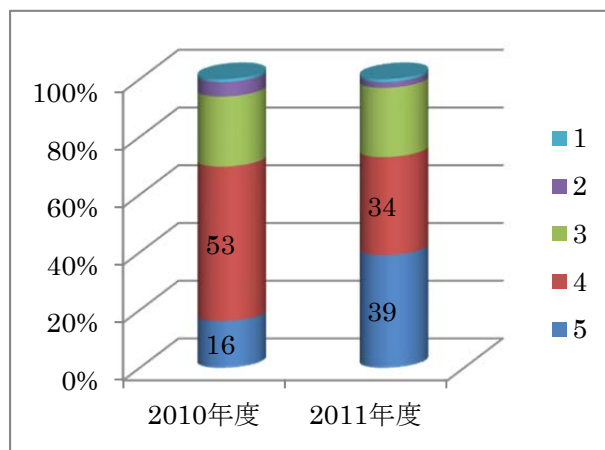


図11は、「授業に、しっかり参加できた」という項目に対しての、学生たちへのアンケート結果をまとめたものである。2010年度というのは、「2010年度後期」を示し、2011年度というのは、2011年度後期を示す。両者の間には、「5」と答えている学生の割合に大きな差が見られる。

表3

	2010 年度後期(n=99)		2011 年度後期(n=92)		t(189)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
授業への参加	3.79	0.81	4.10	0.90	-2.50 *

注:* $p<.05$

表3は、「授業への参加」について、2010年度後期と2011年度の後期の間における平均値の差を、有意水準5%で両側検定のt検定により検討した結果をまとめたものである。表から分かるように、これらの平均値の差は有意であった。

学生たちの「提案」から「キャッチフレーズ」を作って復唱させたり、授業で流す「英語の歌のリクエスト」をさせたり、学生自身の「行動」をもとに授業での座席の位置を決めたり、数多くのクラスメートと知り合いになることもできる「特派員」を導入したり、それら一つ一つのことが、より多くの学生を授業に参加させることができたと言えるのではないかな。

4. おわりに

2009年度より、授業の中に「協同学習」のワークショップで学んだ、「学習目標の設定」、「互恵的な協力関係」、「振り返り」等の考え方を採り入れ始めた。今回は、学生たちに「学習目標」をもっとしっかり認識させるために「プレテスト」を導入した。また、「英語嫌い」も多数存在している学生たちの授業への更なる積極的参加を促すために、「特派員」の技法をも導入した。さらに今回の試みでは、「前向き」な記述という点に焦点を置き、「振り返り」を行わせた。

その結果、「プレテスト」に対して、「しっかり取り組めた」と答える学生の割合が多く見られた。前回の試みと比べ、「学習目標」をより意識させることができた(3.1 参照)と言えそうである。教員が全てを「与えてしまう」のは楽ではあるが、やはり、学生自身に実体験(=参加)させないと「問題を意識」させられないということなのであろう。

今回は、「自分で」考えてから、「皆で情報交換」という形を極力保てるように最初の段階から呼びかけた。その結果、「自分の弱点が見えてきた」、「理解が深まった」といったコメントが見られた。「聞く」ばかりではなく、自ら、実行する(自分で考える)事が大切なのだ。

今回初めて導入した「特派員」と、従来からの「グループ活動」を、統計的に比較してみた。その2項目に対して、「しっかり参加できた」と答える学生間の平均値の差を、有意水準1%で両側検定のt検定により検討した結果、これらの平均値の差は有意であった(3.3.2 参照)。また、「授業への参加」について、2010年度後期と2011年度後期の間における平均値の差を、有意水準5%で両側検定のt検定により検討した結果、これらの平均値の差も有意であることが分かった(3.5 参照)。

今回の試みでは、前回の時のように「役割分担」で学生をがんじがらめにしなくても、学生たちが授業に参加してくれたことが最も喜ばしことだと言えることができる。これは、もちろん、「特派員」の技

法の威力による所もあるのだが、それよりもむしろ、最初の段階から「個人志向」と「集団思考」のけじめを、しっかりつけさせようとしたことも大きく影響しているように思われる。今回の「振り返り」では、「前向き」な言葉が使用できるよう、最初の段階から学生に「声掛け」をし、その結果、2010年度にはほとんど不可能に近かった「前向き」な記述が今回は可能となった。このことから、「最初が肝心」だと言うことができるのではないか。

今回は、LLのマイクのモニター機能を用いたことも、大きく貢献しているように思われる。ただ、LL教室をいつも使える訳でもなく、機器の機能にばかりに頼ることは危険である。しかも、マイクを秩序良く「右手回り」に回して行くことも、「最初の段階」での指示を怠ると、全く機能しなくなってしまうのは言うまでもない。

LLのマイク機能が使えないような場合は、自分の意見に目が向けられていることを、学生たちが意識できるような仕掛けが必要かもしれない。例えば、授業中に自分が出した「意見」を付箋などに書き出し、授業後は教室の壁にグループごとに貼り出すということも一つの方法となるかもしれない。授業後に意見が掲示されていることは、後から何回も見直すことが可能となり、自然な形で授業の復習を行うことも可能となる。

「学生の参加型授業」への挑戦は、永遠である。今は学生を授業に参加させる事だけで精一杯というのが現状であるが、行く行くは少しでも「学生の英語能力の向上を促す」ことも視野に入れた授業を目指していけたらと思う。

参考文献

協同学習法ワークショップ〈Basic〉 2009年改訂版 日本協同教育学会

協同学習法ワークショップ〈Advance〉 ver.2.0 日本協同教育学会

(本稿は2012年9月に開催された「日本協同教育学会第9回大会」での口頭発表を加筆・修正したものである。ご意見をいただいた立教大学の伏野久美子先生を始め諸先生方に、この場をお借りして深く感謝を申し上げます。)

参考資料

資料1 キャッチフレーズ(学生の提案をもとに)

思いやりの心

このふれ合いを大切に

明るく楽しく元気よく

元気にあいさつ

笑顔で顔見て

しっかり聞いて しっかり伝えよう
相槌 頷き 合いの手大事
どンドン声かけ みんな友だち
みんなのためにできることを
前向きに自分から
自信持って精一杯
時間守ってメリハリつけて
小さな感動と「ありがとう」を見つけよう

資料2 プレテスト(例)

「どうしましたか?」/「どちらの耳ですか?」/「それはお気の毒に」/「耳鼻科に行ってください」
「私について来てください」/「どういたしまして」

資料3 音読プリント(例)

【表面】

N:お手伝いしましょうか
(C) I (h) (y) ?
P:お願いします
I hope so.
頭痛がして耳がひどく痛むんです
I (h) a (h) (a) an (a) (e) .
N:どちらの耳ですか?
(W) (e) is it?
...

【裏面】

N:お手伝いしましょうか
(Can) I (help) (you)?
P:お願いします
I hope so.
頭痛がして耳がひどく痛むんです
I (have)a(headache)(and)an(awful)(earache).
N:どちらの耳ですか?
(Which) (ear) is it?
...

資料4 「気づき」のメモ(例)

- Can I help you? の最後は上げる
- I have a headache. の 'a' を忘れない
- Which ear is it? の 'is it' の語順に気を付ける
- It's my right ear. の 'my' を忘れない